

大学における西洋史概説の授業改善に関する研究

青 柳 かおり*

(平成29年12月19日受理)

【要 旨】 近年、大学の授業においてアクティブラーニングや学生が主体となった学習および、時間外学習が求められている。そのような方針に基づき、筆者はこれまで講義中心であった西洋史概説において、講義のみならず学生主体の学習を取り入れた授業を試みた。本稿では、どのような取り組みが学生が意欲的かつ主体的に学習するために効果があるのか、西洋史概説（イギリス史）の授業をもとに検討する。

I 問題と目的

これまで、一般的に大学の西洋史概説等の概説の授業においては、基本的な知識を学生に理解させることが中心であり、講義形式が取られることが多かった。しかし近年、アクティブラーニングが推奨されるようになり、様々な方法で学生自身が活動して学んでいく取り組みが進められている¹⁾。西洋史概説の授業では、世界史においてヨーロッパやアメリカを中心に古代から近現代までの長期の時代、広い地域の歴史の基本的な知識や流れを伝えることが主要な目的となっている。そのため、ある特定のテーマを学生が調査してプレゼンテーションを行ったり、授業中にグループ討論を行ったりする形式を取ることが難しい面がある。さらに、この科目は大学によっては履修者が多数になる場合もあり²⁾、そのような状況では学生による発表は困難になることも考えられる。

筆者は西洋史（イギリス史）を専門としており、西洋史概説の授業を担当している。この授業では、授業中のワークシートの活用、時間外学習（小テストの宿題）、映像資料の鑑賞を中心に、学生が主体となって集中力を高めて意欲的に学習するための工夫を試みた。この授業は教育福祉科学部情報社会文化課程社会文化コース二年生および学校教育課程社会選修一年生（学校教育課程においては世界史概説I）の必修科目であり、2016年度後期の受講者は17名であった。本稿では、学生に主体的な取り組みをしてもらうため、どのような工夫を行ったのか、また、どのような効果がみられたのかを検証したい。さらに、それらの試みの問題点や改善策についても検討していきたい。

* あおやぎ かおり 大分大学教育学部社会科教育教室（西洋史）

Ⅱ 西洋史概説のねらいとシラバス

西洋史概説のシラバスは以下の通りである。

【授業のねらい】

古代から現代までの西洋史の概説を行う。世界史の展開に大きな役割を果たしたイギリスを中心に講義し、西洋史の基本的な知識を得ること、異文化理解を深めることを目的とする。

また、中学社会、高校世界史の授業を展開する知識と技能を実践的に身につけ、資質の高い社会科教員の養成を目指す。

【具体的な到達目標】

- 1 西洋史の基本的な知識を獲得し、主要な事件や人物を説明できるようになる。
- 2 異文化理解を深める。
- 3 社会科の教職に関する基礎的な知識と専門的な知識・技能を体系的に修得する。

【授業の内容】

以下のような内容で映像を用いて講義を行う。授業中にワークシートを作成するほか、感想文を書くなどの作業を行う。

1. ガイダンス
2. ローマ帝国と古代のイギリス
3. 中世前期のイギリスとヨーロッパ
4. 百年戦争とジャンヌ・ダルク
5. イングランド宗教改革
6. 大航海時代
7. ピューリタン革命と王政復古
8. 名誉革命体制とヨーロッパ
9. 18世紀における戦争と貿易
10. イギリス産業革命
11. フランス革命と対仏大同盟
12. 19世紀の階級とジェントルマン
13. 帝国主義
14. 二つの世界大戦と日本
15. 現代におけるイギリスとEU

【時間外学習】

毎週、宿題（講義内容に関する小テスト）を課す。

【教科書】使用しない。

【参考書】

川北稔編『世界各国史 イギリス史』山川出版社、1998年。

授業中に文献リストを配布する。

【成績評価方法及び評価の割合（%を明示）】

小テスト50%、学期末レポート50%

以上がシラバスの内容である。

初回のガイダンスにおいて、シラバスの内容を確認するとともに、映像を用いて講義すること、授業中に自分でワークシートに記入する作業を行ったり、映像資料に対する感想文を書いたりするほか、時間外学習を毎回課すなど学生の活動が多くなることを説明した。この授業ではほぼ毎回、パワーポイントやNHK世界遺産、映画の一部等のDVDを上映した。イギリス史の導入として、イギリスの正式名称がグレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国(The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland, UK)であり、四つの独立した王国や地域であったイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドの連合王国であることを歴史的に説明した。さらにイギリスの国旗の変遷の画像を示して、国旗がなぜこのように変化していくのか考えさせた。

初回には、学生に次のような資料を印刷して配布した。

- 1) 2016年度版西洋史文献リスト
- 2) 中世のフランスとイングランドの地図
- 3) 18世紀の世界地図（イギリス領植民地がわかるもの）
- 4) 現在のイギリスの地図
- 5) 古代から現在までのイギリス王室系図
- 6) 授業の進め方、受講の注意点

このように授業の進め方を確認し、授業の助けとなる資料を配布してから、第一回目の講義を開始することになった。

Ⅲ イングランド宗教改革の授業

次に、全体の中でもイギリス史のみならず世界史において特に重要なテーマであると思われる「イングランド宗教改革」³⁾と「イギリス産業革命」⁴⁾を取り上げて、授業内容および実際に使用したワークシートや時間外学習の成果について述べたい。また、映像資料の重要性についても言及する。

まず、近世ローマ教皇庁による贖宥状の販売の問題点および、ルターによるドイツ宗教改革の開始とそのヨーロッパ大陸への拡大について解説した。善行や寄付を行ったり贖宥状を購入したりしても死後救われることにはならず、ルターなどの改革者にとっては信仰と聖書を読むことが最も重要であった。プロテスタントでは救いに必要なことは信仰のみであり、カトリックの教義とプロテスタントの教義の違いを学生に説明し、理解させた。また、イングランドにおける教会改革に先駆的な役割を果たした聖職者について説明し、ヘンリ八世の治世以前に、プロテスタント的な思想がヨーロッパ大陸からイングランドに入ってきていたことを述べた。16世紀テューダー朝はイングランドで宗教が何度も変化した時代であり、君主ごとに特徴があるため、四人の君主の治世における宗教政策をまとめた。

- 1) ヘンリ八世：宗教改革が開始された。カトリックから独立したイングランド国教会が成立した。ただし、教義や儀式等の内部の改革には至らなかった。
- 2) エドワード六世：急進的プロテスタントの改革がなされ、教義や儀式もプロテスタントに変化した。
- 3) メアリ：カトリック教会への復帰。これまでの宗教改革についての法律がすべて廃止された。

4) エリザベス：穏健プロテスタントの改革がなされ、イングランド国教会が回復された。明確に教義はプロテスタントであるが、国外・国内にカトリックの脅威があったためカトリック的な要素が残された。治世末期にはほとんどの国民が国教徒となり、国教会が定着していく。

さらにイングランドの宗教改革が、ドイツ、スイス、フランス、スペイン、ローマ教皇庁、スコットランドといったヨーロッパ各国の政治・宗教と関連しながら展開したことも重視して説明した。

次にワークシートの内容は以下のものであった。[]の部分は空欄になっており、君主や重要な人物名、事件、キーワードを記入してもらう形式になっている。用紙はA3一枚で、左側に文章を記載し右側はすべて白紙になっている。

「イングランド宗教改革」

- ・ヘンリ七世による王権の強化、外交

皇太子アーサーとスペイン王女キャサリン・オヴ・アラゴン 政略結婚

1501年 キャサリンと義理の弟ヘンリ 結婚

1509年 [ヘンリ八世]即位

- ・ヘンリ八世の離婚問題（婚姻無効）

離婚への反対 ローマ教皇とカール五世

ローマ教皇と国王の争い

1533年 アン・ブリンと秘密結婚、エリザベス誕生

1534年11月 [国王至上法] 成立

イングランド国教会の成立

カトリック教会から独立。ローマ教皇の権威はイングランドには及ばない。

国王がイングランド国教会の首長となる。

- ・ヘンリ八世と六人の妻

王位継承順位 1 エドワード、2 メアリ、3 エリザベス

- ・修道院解散

・[エドワード六世]の治世（1547-1553）のプロテスタント化
儀式、教義の改革がすすめられた。

祈禱書、礼拝統一法の制定

四十二箇条の成立

・16世紀初期、ヨーロッパにおける宗教改革
プロテスタントの特徴：信仰のみ。聖書を重視。

- ・[メアリ]の治世（在位1553-1558）カトリックへの復帰

・[エリザベス]の治世（在位1558-1603）における宗教改革
穏健プロテスタント
イングランド国教会の再建
1559年3月 国王至上法
1559年4月 礼拝統一法
1563年 三十九箇条
儀式、聖職服、組織にカトリックの伝統を残した。

・カトリックの脅威
外国：[スペイン、フランス、ローマ教皇庁]
国内：[カトリック貴族・ジェントリ]
カトリック教徒スコットランド女王メアリの支持者
ピューリタン(Puritan, 急進的な国教徒)からの批判

→ エリザベス政府：イングランド国教会のもとでの国家統合
カトリックに配慮して穏健な方法でプロテスタント化
以上。

A3のワークシートの右側半分はすべて空白になっており、自由にノートを取るようになって
いる。板書やスライドの内容を筆記するのは大変であるため、重要事項はこちらで記入し、学
生がノートを取る時間の節約に努めた。筆者はスライドを使用しながら口頭で詳細に説明をし
たが、その内容が多かったにもかかわらず、学生は発言内容のノートを取っていた。各自の
ワークシートを見る限り、かなりの分量を筆記していた。

授業の終わりに小テストを配布した。小テストは時間外学習であり、翌週までに解答を提出
するようにした。宗教改革についての問いは次の三題であった。

- 1) ヘンリ八世治世の国王至上法の内容について説明しなさい。
- 2) エドワード六世治世にプロテスタント化がすすめられた。礼拝統一法の内容について
説明しなさい。
- 3) エリザベス治世におけるカトリックの脅威について、外国と国内に分けて説明しな
さい。

以下、学生の解答例を示していきたい。

1) 「1534年11月に制定されたものであり、これによりイングランド国教会が成立し、ローマ
教皇の権威はイングランドには及ばないと定めた。国王がイングランド国教会の地上における
唯一最高の首長だと主張し、結果的にカトリック教会から独立すると定めた。」

「ローマ教皇の権威はイングランドに及ぶことはなく、国王がイングランド国教会の唯一最高
の首長であるとして、ローマ教皇権の破棄とともに国教会における国王至上権の確立を示した
もの。」

2) 「1552年に制定され、祈祷書を必ず使ってイングランド国教会の礼拝をすること。違反す
ると罰金、投獄などの刑罰を与えられる。かつ礼拝はイングランド国教会に統一するなど、典

礼を統一した法律」

「イングランド国教会の儀式や祈祷を英語によってまとめ、内容が難しめであったカトリックの典礼書よりも簡素にした祈祷書を必ず使ってイングランド国教会の礼拝をすることを義務付ける。これまで通り各地でそれぞれ違うミサを行うと、違反とみなし、罰金または投獄などの刑罰を行う。イングランド国教会の礼拝をすべて統一するということ。」

3) 「外国：スペイン、フランス、ローマ教皇庁などとの戦争のおそれもあり、教皇とイエズス会士による女王の暗殺未遂も起きている。国内：カトリック貴族やジェントリが多く、身分の高さのため厳しく罰することができなかったことや、正統なカトリック教徒と呼ばれていたメアリ・ステュアートの支持者による反乱があった。」

「外国：スペイン、フランス、ローマ教皇庁などのカトリック勢の脅威にさらされており、戦争のおそれがあった。1570年には教皇からエリザベスは破門されたり、教皇とイエズス会士による暗殺未遂などもあった。国内：国内にはカトリック貴族やジェントリが多く、彼らは身分が高いため厳しく罰することができない。1569年には、カトリック教徒が多い北部で反乱がおきた。後に鎮圧した。また、スコットランド女王メアリ・ステュアートを支持する声が上がリ、王位を主張した。」

以上のように学生は講義内容を理解し、解答している者が多かった。

IV イギリス産業革命の授業

次に「イギリス産業革命」の回について検討したい。イギリスが産業革命（工業化）に成功して世界の工場と言われるほど発展したこと、および工業化が進んでイギリスが発展した前提として、奴隷貿易、砂糖貿易によってイギリスが多大な利益を得ていたことを、アフリカ、アメリカ・西インド諸島植民地、イギリスの関係をもとに世界史の流れの中で理解させた。また、イギリスは発展したものの、アフリカでは奴隷貿易による搾取、人口の減少という被害があった点、西インド諸島ではサトウキビのプランテーション、インフラの未整備、イギリス人の不在地主といった問題があり、現代においてもそれらの影響が残っており、貧困に陥っていることも指摘した。

ワークシートは以下のようなものである。

「産業革命（工業化）」1760-1850頃

フランス革命 ⇒ 1793年、ルイ16世、処刑。王政の廃止、共和制 対仏大同盟

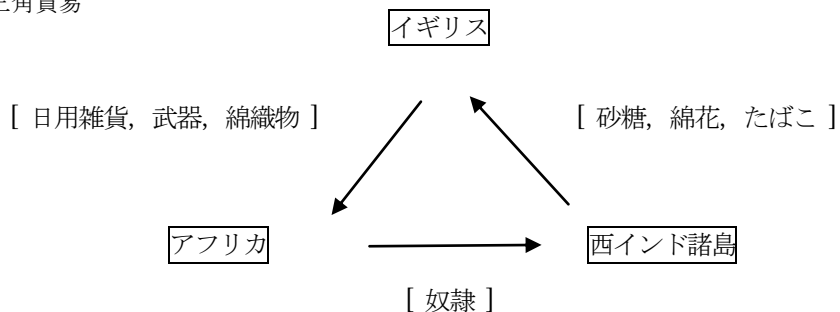
・イギリスは世界で最初に工業化に成功した綿織物が中心

・[インド産綿織物] (キャラコ) の輸入
綿織物の国内生産開始
キャラコ輸入禁止法、使用禁止法

綿織物の人気 → 大量生産 → 18世紀後半、機械の発明
紡績機、力織機、蒸気機関など
鉄道、石炭、製鉄、機械等、工業の発展

・イギリス綿工業の発展
イギリス：世界の工場

・砂糖と奴隷の貿易
三角貿易



奴隷による砂糖プランテーション → 奴隷貿易業者、プランターの利益

以上である。また、この回では授業の後半にNHK世界遺産「イギリスの近代化 産業革命」のDVD（全八編）から特に重要と思われる三編を鑑賞した。1）海商都市リバプール（奴隷貿易）、2）ダーwent溪谷の工場群（紡績機）、3）ブレナヴォンの産業景観（炭鉱）である。それぞれ5分程度の長さであり、映像によって学生は当時の奴隷貿易、紡績機、炭鉱の様子について理解を深めることができた。

小テストは次の三題であった。

- 1) なぜイギリスでは綿織物をきっかけに工業化が始まったのか説明しなさい。
- 2) 綿織物を大量生産するために、どのような発明がなされたのか説明しなさい。
- 3) 砂糖と奴隷の三角貿易について文章で説明しなさい。

以下、学生による実際の解答をいくつか示したい。

1) 「かつてのイギリスは17世紀後半からインド産綿織物（キャラコ）が輸入され流行したが、インド貿易において赤字となったため綿織物を国内で生産することにし、かつ大量生産をするために機械が発明されたから。」

「イギリスは多数の植民地を持っており、その中のインドが綿織物を生産していた。イギリスではそのインド産綿織物が17世紀後半に輸入され国内で大流行し、大量に輸入されるようになった。しかし、大量に綿織物を輸入することにより、インド貿易は赤字を引き起こし、これをきっかけに綿織物のイギリス国内生産が開始され工業化が始まった。」

「もともとイギリスでは伝統的織物といえば毛織物だった。しかし、寒い地方にだけ需要があるウールに比べ、清潔で染色可能かつカラフルにプリントできる綿織物は17世紀後半からイン

ド産のキャラコと言われる綿織物を輸入したことをきっかけに流行した。それ以降も大量輸入を続けたが、イギリスが赤字に陥ったので綿織物の国内生産が始まり、もともと豊富であった労働力や砂糖貿易による資本、広大な市場を利用して工業化をすすめた。」

2) 「ハーグリーブスのジェニー紡績機、ワットの蒸気機関、アークライトの水力紡績機、クロンプトンのミュール紡績機、カートライトの力織機、これらの発明がなされた。」

「手工業で綿織物をつくるのを止めて、機械による大量生産を試みた。とりわけ18世紀は、蒸気機関の発明から始まって、織るための紡績機（水力紡績機、ミュール紡績機）、力織機などの機械が発明された。このような機械は生産性を高めた。また大量生産を可能にするため、原料の輸送を目的として鉄道や列車、運河の発明もされた。」

「綿織物の大量生産の為に、1764年にハーグリーブスのジェニー紡績機、1769年にアークライトの水力紡績機、1779年にクロンプトンのミュール紡績機、1785年にカートライトの力織機などが発明された。また、1765年にはワットが蒸気機関を発明し、製品、原料などの大量輸送のために鉄道、列車、運河が発明、発展していった。」

3) 「三角貿易は17世紀後半から18世紀に展開された貿易形態である。砂糖は高額であったがヨーロッパやイギリス国内で需要が高く、三角貿易によってこの砂糖を手に入れていた。ここで行われた三角貿易の実態とは、イギリスからでた船がインド産綿織物、日用品、武器などをアフリカに持っていき、アフリカから黒人奴隷を西インド諸島に運び、西インド諸島からはイギリスへ砂糖、タバコ、綿花を積み込んで帰ってくるというものであった。西インド諸島ではアフリカから連れてこられた黒人奴隷たちによってサトウキビ栽培が行われていた。」

「アフリカから西インド諸島へ黒人奴隷が輸入された。その黒人らが砂糖、タバコ、綿花をつくり、イギリスに輸入した。そのイギリスからアフリカへインド産綿織物、日用品、武器を輸入した。そのなかで西インド諸島で作られる砂糖は高額で、ヨーロッパやイギリス国内で需要が高かった。」

「17世紀後半、イギリス領西インド諸島でアフリカ系奴隷によるサトウキビ栽培がされ、高額でもヨーロッパやイギリス国内で需要が高かった砂糖を作らせていた。その砂糖とタバコ、綿花を西インド諸島からイギリスが輸入し、その綿花を使ってできた綿織物と日用雑貨、武器をアフリカに輸出していた。アフリカはその武器で暑い中でもサトウキビ栽培のために働ける黒人を捕まえ、西インド諸島に奴隷として輸出していた。」

本稿で取り上げたイングランド宗教改革と産業革命の回は、両方とも講義内容が多く、進度が早かった。また、宗教改革の回では時間の関係で映像を上映できなかった⁵⁾。しかし、学生は予想以上に内容を理解してノートを取っており、小テストの解答もこちらが示した要点をだいたい押さえていた。講義内容に即して自分自身で解答させるようにしたためか、全員が他の学生の解答やインターネットの情報を写すこともなく、各自の文章で書いており、宿題とした小テストには、自主的な時間外学習の効果があると思われる。

V おわりに

今回の授業では、パワーポイントや画像を中心に講義するとともに、世界史に関するDVDの映像資料を用いた。また、重要事項を理解してもらうためのワークシートを毎回配布して、各

自、自分で考えながら講義内容やキーワードをノートしてもらった。この方法によって、ただ話を聞くだけではなく、自発的に集中してノートやメモを取ることを習慣づけた。例年、この授業のアンケートでは、ノートを取る分量が多くて大変だという意見が多くみられた。この点を改善し、2015年度から教員の方でレジユメのようなワークシートを用意したため、学生の労力は少なくなっているはずである。また、西洋史概説は非常に範囲が広いにもかかわらず、半期で古代から近現代まで完了させないといけないため、進度も早くならざるをえなかった。自然とノートを取る分量も多くなっていき、学生にとっては負担となったであろう。ただし、学生からはノートを取ることで授業中眠くなることもなく集中して学習できた、という意見もあり一定の理解は得られたようである。

この授業では三年前までは毎回の小テストではなく、期末レポートを課して講義内容に即した問題について解答を書いて提出してもらっていたが、昨年度からは時間外学習を取り入れて、毎回宿題を出すことにした。講義内容について記述式の三題の小テストを行い、次回に提出してもらうようにしたのである。学期末にすべての内容をまとめて復習するよりも、このやり方の方が、学生は毎週の講義内容を理解できたか、その都度確認することができたため効果的であった。小テストはすべて筆者がチェックしたが、講義を聞いて理解すれば解答できる問いであったため、正解率は高かった。この小テストに加えて、期末レポートとして、西洋史に関する本を三冊読ませ読書レポートを課すことにした。

次に改善したい点について述べたい。この授業は比較的少人数の授業であり、グループ討論とまではいかなくとも、もっと学生同士で話し合う機会を設けた方がよかったと思われる。例えば、世界遺産などの世界史に関するDVDや映画の一部を見せた後に、意見を出し合うことも歴史を理解する上で重要であろう。大学によっては大教室で受講生が200人以上になる授業もあるが、そうすると、学生の私語が非常に多く、私語対策に教員の労力と時間が取られることになる⁶⁾。教員が学生の様子を把握できず、授業も一方的な講義になりがちである。そのような環境と比較すると、この授業は少人数で私語はなく、もっと学生のアクティブラーニングに結び付く活動を行う試みができたと考えられる。

また、毎回の小テストに対するフィードバックをできなかった点も反省したい。すでに述べたようにこの授業は内容が多く、前回の振り返りを簡単にする程度で、フィードバックをする時間が取れなかった。多くの学生が誤解をしていた場合があれば小テストについて説明したが、小テストの解答に大きな誤りがなかったこともあり、解説しないでもいた。しかし、ある程度小テストの解答について説明し、学生の理解を確かにすべきであったかもしれない。ただ、西洋史概説の授業において、前回の内容についての質問に答えていて相当な時間が取られ、そのため学生から批判が多かったという事例もある⁷⁾。この授業では宿題をしてこないという学生はなく、学生は各自で考えて解答しており内容を正しく理解をしていたと思われる。大きな誤解や、授業内容が理解できていないというような記述はなく、彼らが時間外学習に主体的に取り組んでいたことがわかった。以前のような学期末にまとめてテストをする形よりも、この方が理解は深まったと考えられる。

このように、基本的知識を教えるために、講義形式中心の授業であっても、様々な工夫によって学生が受け身ではなく主体的に学ぶことができると思われる。例えば、授業中の適切な分量のワークシートの利用や、毎回の講義内容に即した小テストといった課題を与えることである。また、講義内容の理解を助ける映像の鑑賞や感想文の作成も、学生の自主的な学習に

とって効果があるといえよう。

注

- 1) 徳橋曜, 小林真, 144頁。
- 2) 中谷功治, 1頁。2006年度の西洋史概説には春学期約300名, 秋学期約500名の受講者があったという。
- 3) 中学校における宗教改革についての授業実践を分析した研究に, 鵜木毅(2012年)がある。また, 西洋史研究における宗教改革についての研究動向については, 堀内隆行(2013年)178-181頁を参照。
- 4) 中学校における産業革命についての授業実践を分析した研究に, 藤瀬泰司, 嘉村潔高, 佐藤慶明, 源洋子(2015年)がある。
- 5) 「BBC世界に衝撃を与えた日一英国王妃アン・ブーリンの処刑」(約20分)という映像資料がある。映像を用いた世界史の授業については, 國原幸一郎(2013年)146-148頁を参照。
- 6) 中谷, 6-7頁。
- 7) 中谷, 3頁。

参考文献

<教育実践>

- 甘利弘樹「医学史に関する授業デザインの試み(3)ー大分県の地域教育における活用を目的としてー」『教育実践総合センター紀要』no. 33 (2015年)113-128頁。
- 甘利弘樹「外国史・世界史授業のアクティブラーニング化への試み(1)ー中国史を中心にー」『教育実践総合センター紀要』no. 34 (2016年)49-64頁。
- 鵜木毅「中学校社会科歴史的分野におけるヨーロッパ史との関わりに関する一試案」『中等教育研究紀要』第52号(2012年)247-252頁。
- 楠山修作「東洋史概説の講義について」『追手門学院大学文学部紀要』35号(1999年)1-17頁。
- 國原幸一郎「映像を用いた世界史の授業からみた大学生の歴史認識の形成～導入教材から内容教材への転換を求めて～」『麗澤大学紀要』第97巻(2013年)141-158頁。
- 佐藤浩章編『大学教員のための授業方法とデザイン』玉川大学出版部, 2010年。
- 徳橋曜, 小林真「高等学校の世界史教育と大学の歴史学ー歴史教育の接続の観点からー」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究』no. 11(2016年)143-157頁。
- 中谷功治「大学における授業展開の事例研究ー「西洋史概説」の講義からー」『総研ジャーナル』(関西学院大学総合教育研究室)vol. 91(2008年)1-10頁。
- 藤瀬泰司, 嘉村潔高, 佐藤慶明, 源洋子「批判的教科書活用論に基づく中学校社会科授業開発(1):「産業革命と欧米諸国」の場合」『熊本大学教育実践研究』第32号(2015年)77-88頁。
- 堀内隆行「西洋史と日本史をどう結ぶか」『社会の学び方』(平成24年度文部科学省「知識基盤社会の教育を担う教員養成プロジェクト」報告書)(2013年)177-189頁。
- 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂, 2014年。

<西洋史>

秋田茂『イギリス帝国の歴史』中公新書，2012年。

川北稔編『イギリス史』（新版 世界各国史11）山川出版社，1998年。

木畑洋一，秋田茂編『近代イギリスの歴史—16世紀から現代まで』ミネルヴァ書房，2011年。

君塚直隆『ヴィクトリア女王—大英帝国の“戦う女王”』中公新書，2007年。

君塚直隆『物語 イギリスの歴史』上・下，中公新書，2015年。

小泉徹『宗教改革とその時代』（世界史リブレット27）山川出版社，1996年。

近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社，2010年。

長谷川貴彦『産業革命』（世界史リブレット116）山川出版社，2012年。

村岡健次，川北稔編『イギリス近代史—宗教改革から現代まで』改訂版，ミネルヴァ書房，2003年。

J・R・H・ムアマン著，八代崇他訳『イギリス教会史』聖公会出版，1991年。

松村赴，富田虎男編『英米史辞典』研究社，2000年。

Study on the Improvements of Lectures of the Western History in the University

Kaori AOYAGI

Abstract

Recently, it is required to introduce active learning and overtime learning in lectures in the university so that students are actively involved in the class. In this study, I tried to give the Western history adapting the method such as the new attempt to use worksheet in the class and assign homework to students which enables them to learn world history voluntarily. It seemed that adapting active learning in history class would promote their understanding of world history.

Key words : Introduction to Western History, World History, British History